

「春に観たい名画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Maslenitsa_kustodiev.jpg

1916 年 | 油彩、キャンバス | 71 × 98 cm | Isaak Brodsky Museum (サンクトペテルブルク)

前々回よりめぐり来る季節に合う名画と俳句を選びお届けしています。

第3回目は「春」に観たい名画と俳句です。

絵画の制作年順にとりあげています。

フラゴナール、シスレー、ゴッホ、ソールベリ、クストーディエフの作品で春を感じていただき、世界最短の定型詩で俳人の季節に対する感性をお楽しみ下さい。

1. ぶらんこ ジャン・オノレ・フラゴナール (1732-1806)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fragonard,_The_Swing.jpg

1768 年頃 | 油彩、キャンバス | 81 × 64 cm | ウォレス・コレクション (ロンドン)

フラゴナールは18世紀フランスの画家で、自由な立場で上流階級の人々と交流し個人注文を受け、数々の官能的な傑作を描きました。

この絵の舞台はサン・ジュリアン伯爵の緑深い別邸の庭。

庭園に設けられたぶらんこにピンク色のシルクのドレスを身にまとった貴婦人が、ふわりとしたやわらかな描写も手伝って、軽やかな印象を抱かせてくれる作品です。

しかしこの絵には、複雑な恋愛模様が隠されています。

まず、右手の根元に近いところからぶらんこを押している年配の男性が、ぶらんこに乗る貴婦人の夫。

一方、画面左のキューピット像の下には若い男性が隠れています。

貴婦人は片方の靴を放り出し、この男性に親しげな表情で視線を送っていますが、キューピット像は「しーっ」という仕草をしています。

これは公にできない恋愛の暗示です。

若い男性は貴婦人の愛人で、この絵は夫の前で遊び戯れる不倫関係の男女を描いたものです。

愛人はサン・ジュリアン伯爵本人といわれています。

ぶらんこは考えてみればそのまんまの名前ですが、ゆさわり、ふらここ、ぶらんこ時代とともに名称が変わってきています。

また鞦韆（しゅうせん）ともいい、これは中国北方民族のものが中国に伝わって呼ばれた名だそうです。

平安時代から長い間大人の遊具でしたが、江戸時代以降は完全に子どもたちに主導権を握られてしまいました。

大人もたまには戯れて揺れてみたいものです。

ここでは三春の季語「ぶらんこ」「鞦韆」を詠んだ句を選びました。

ぶらんこや桜の花を待ちながら

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

鞦韆は漕ぐべし愛は奪ふべし

三橋鷹女（みつはし たかじょ）（1899-1972）

2. モレジーのレガッタ アルフレッド・シスレー (1839-1899)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfred_Sisley_050.jpg

1874 年 | 油彩、キャンバス | 66 × 91.5 cm) | オルセー美術館

シスレーはイギリス人ですが、主にフランスで活躍した画家。
 1862 年に、モネやルノワールなどとお会って制作をともにします。
 1871 年頃からパリ近郊のセーヌ河畔の町を転々とし、空や水辺の風景画を多く描きました。
 明るい色調、自在な筆づかいで、光や大気が移ろいゆく効果を探求し、印象派にとって欠かせない存在でした。
 絵は 1874 年にイギリスに里帰り旅行し、その途中、テムズ河上流のハンプトン・コート城の対岸の町、モレジーでの有名なレガッタ競技、ヘンリー・ロイヤル・レガッタの光景を描いたものです。
 ライトグリーンと薄い黄土色のゾーンが複雑に交差する曇り空の下、数隻のボートがゴールを目指してしのぎを削っています。
 描かれた人物群は大変シンプルですが、ボートの漕ぎ手の動き、観客たちの興奮した様子、風になびく旗の音まで聞こえてきそうです。

日本に最初にレガッタのようなボートクラブができたのは慶応 2 年（1866 年）の横浜。
 明治 10 年代から旧制高校や大学がボートレース（競漕）を始め、早慶レガッタは明治 38 年（1905 年）隅田川で第 1 回が行われました。
 「オール持つ手に、花が散る」「蛍飛ぶ」「月がさす」「雪が積む」と「競艇歌」にあるように、レースは 3 月から 11 月まで行われますが、待たれた後の春のレースが最も華やぎます。

ここでは晩春の季語「競漕（きょうそう）」を詠んだ句を選びました。

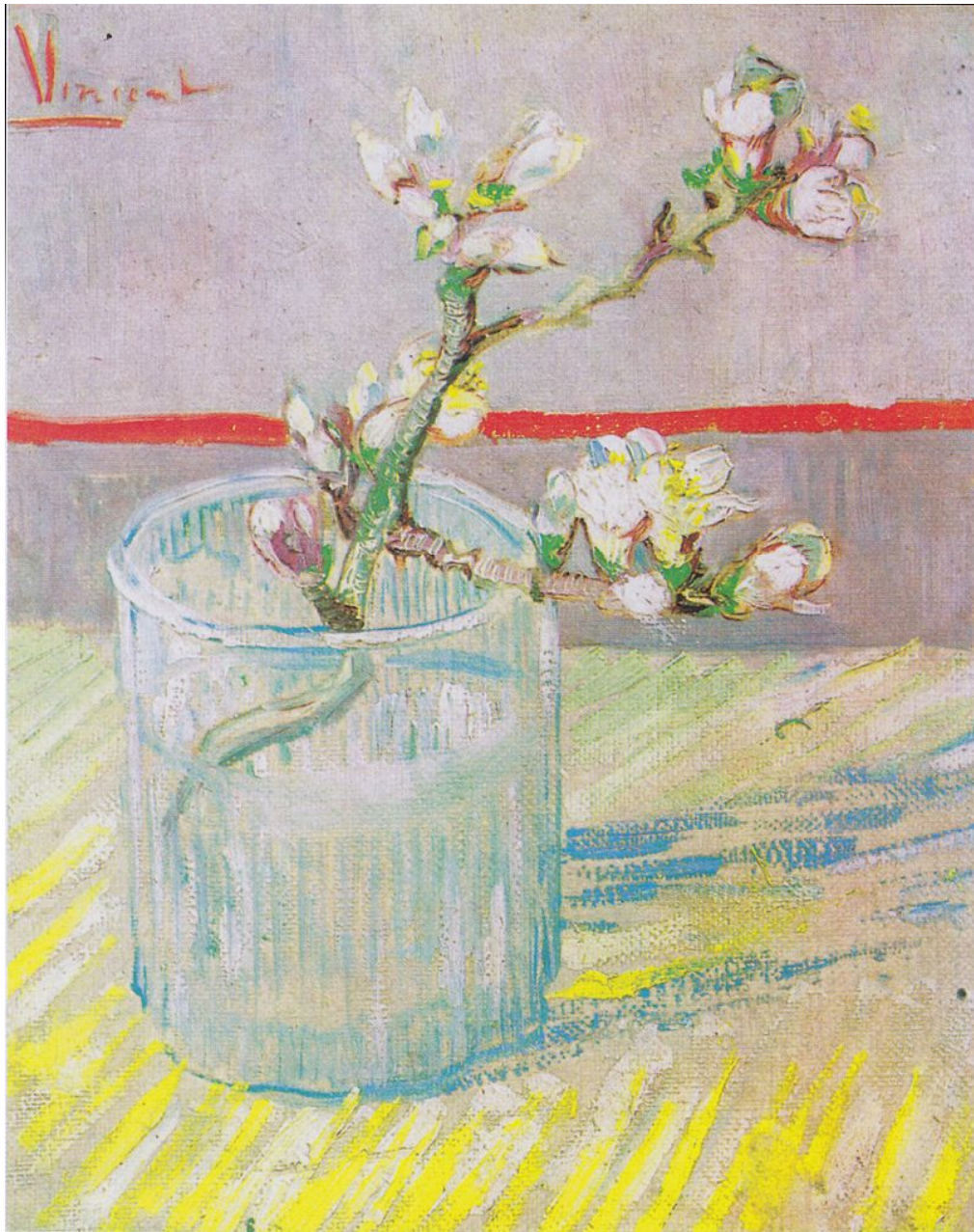
競漕や午後の風波立ちわたり

水原秋櫻子（みずはら しゅうおうし）（1892-1981）

競漕やはがねの四股が屈伸す

伊東肇（いとう はじめ）（1943-）

3. グラスに入れた花咲くアーモンドの枝 フィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Van_Gogh_-_Blühender_Mandelbaumzweig_in_einem_Glas.jpeg

1888年 | 油彩、キャンバス | 24 × 19cm | アムステルダム ゴッホ美術館

1888年2月、ゴッホはアルルに移住します。

彼が世を去るのはそれからわずか2年後のことです。

悪天候のため戸外で制作できなくなると、ゴッホは静物画や自画像を描きました。

ここでは花を一気に咲かせた1本のアーモンドの枝が生命の証を示しています。

彼の浮世絵への傾倒と花をはじめ自然を愛でる日本人への敬意が込められています。

ピンク、薄紫、黄土色、緑の筆触で繊細なニュアンスをつけた枝のフォルムと、赤のシンプルな水平ラインやインパクトのある署名とを対比させることで、折れ曲がった枝ぶりを引き立てています。

署名を目立つ箇所に入れたのは、新たに移り住んだこの地で心身ともに生まれ変わることを願った彼自身の思いの現れにちがいありません。

アーモンドは和名で扁桃（へんとう）あるいは巴旦杏（はたんきょう）と呼ばれますが、俳句としてはほとんど詠まれていません。

ここでは同じ種類の晩春の季語である「李（すもも）」の花を詠んだ句を選びました。

多摩の瀬の見ゆれば光り李咲く

山口青邨（やまぐち せいそん）（1892-1988）

たそがれはうす墨かぶり花すもも

井沢正江（いざわ まさえ）（1921-2008）

4. 北の花畑 ハラルド・ソールベリ (1869-1935)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Harald Sohlberg, Flower Meadow in the North, 1905.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Harald_Sohlberg,_Flower_Meadow_in_the_North,_1905.jpg)

1905 年 | 油彩、カンバス | 96 × 111 cm | オスロ国立美術館

ソールベリはノルウェーの新ロマン派の画家。
幼い頃から絵画の才能を見出され、コペンハーゲンやワイマールの美術学校で学び、1896 年からパリに滞在。
油絵や多色版画で風景画を多く描きました。
歌川広重などの日本の風景版画に影響を受け、この絵の構図もそれが見えます。
白い花畑が平面的に広がっています。
奥行きを重視するヨーロッパの風景画とはちがって、ソールベリの風景画は静止していて、このことが写真家たちに刺激を与え、風景写真を盛んにしました。
白い花はひな菊のようです。
ひな菊はキク科の多年草で、10cm くらいの茎に直径 2cm ほどの小さな可愛らしい花をつけます。
花は淡紅色・紅色・紫紅色・白・桃色などで一重、二重のものがあります。
もともとヨーロッパに広く自生する花で、「愛する」「愛さない」と花びらを一枚ずつちぎって恋占いに用いる花がこれです。
花期が長く、実際には早春から秋まで咲き続けるので長命菊、延命菊の別名もあります。

ここでは描かれている三春の季語「ひな菊」、英名である「デージー」を詠んだ句を選びました。

デージーは星の雫に息づける

阿部みどり女（あべ みどりじょ）（1886-1980）

雛菊に植ゑ替へられし花時計

稲畑汀子（いなはた ていこ）（1931-2022）

5. マースレニツァ ボリス・クストーディエフ (1878-1927)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Maslenitsa_kustodiev.jpg

1916 年 | 油彩、キャンバス | 71 × 98 cm | Isaak Brodsky Museum (サンクトペテルブルク)

クストーディエフはカスピ海の北岸、ヴォルガ川の河口アストラハン生まれ。
ロシア革命の時期に、ロシアの民衆生活の情景、伝統的な行事や四季の移り変わりを描きました。
1909 年に脊髄腫瘍を患い、数度にわたる手術を受けましたが、麻痺のため余生を車椅子で過ごすこととなります。
しかし、色彩豊かで楽しげな作品は身体の症状をまるでうかがわせず、それどころか、屈託のない愉快な生活という印象を抱かせる作品を多く制作しています。
「マースレニツァ」もその時期の作品の一つです。
「マースレニツァ」は謝肉祭にあたる行事で、主に東スラブ諸国（ロシア、ウクライナ、ベラルーシ）では、クリスマスにつぐ盛り上がりを見せる、冬を見送り、春を迎えるお祭りです。
マースレニツァではブリヌイ（クレープ）を食べます。
絵の中央下でラックに手をついている女性がいますが、ブリヌイを売っているのでしょうか。
ロシア革命の後でも、このような祭り、昔のまんまの風景をクストーディエフは描きのこしておきたいと思ったのでしょうか。

ここでは、キリストの受難を思い、断食などの精進を行う四旬節の前に楽しもうという祭である初春の季語「謝肉祭」を詠んだ句を選びました。

凌霄の花綵振らむ謝肉祭

（凌霄＝のうぜん、ノウゼンカズラ科の低木。大きな赤あるいは橙の大きな花をつけ、他の樹木や壁などに付着してつるを伸ばします。）

（花綵＝はなづな、色とりどりの美しい花を編んで作った布のこと）

文挾夫佐恵（ふばさみ ふさえ）（1914-2014）

素顔さへ仮面にみゆる謝肉祭

石原八東（いしはら やつか）（1919-1998）

私もブリヌイに注目して詠んでみました。

ブリヌイを焼く春寒しウクライナ

白井芳雄

ロシアによるウクライナへの侵攻が 2 月 24 日に開始され、楽しいはずのマースレニツァの時期（2022 年は 2 月 27 日～3 月 6 日）が悲しみと憎しみに包まれました。

2022 年 3 月 24 日現在、ロシアによるウクライナへの侵攻は収まっていません。

不条理な侵攻に対するウクライナの人々の勇気に魂が揺さぶられます。

ロシアの戦費は 1 日 2 兆円以上とも伝えられています。

国民生活に影響が出て、内部圧力、西側諸国の経済的制裁により停戦に至るまで、がんばれウクライナ！！

同じ文化に育まれた地に、兄弟国に、一日も早く平穏な日々が訪れますように。

今回は「春に観たい名画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：瀧澤秀保

『1日1ページで世界の名画がわかる 366日の西洋美術』(三オブックス)(2019年)
ISBN978-4-86673-135-3 C0071

海野弘解説・監修

『366日風景画をめぐる旅』(パイ インターナショナル)(2021年)
ISBN978-4-7562-5445-0 C0071

『現代世界美術全集 8 ゴッホ』(集英社)(1970年)
1371-536008-3041

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修
『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』(角川学芸出版)
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621034-6 C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com
